

## 第2期第14回生涯学習センター運営協議会 議事録

〔日 時〕 2015年6月29日（月）10:00～12:00

〔場 所〕 町田市生涯学習センター 6階学習室2

〔出席者〕 ※敬称略

委員：石川清（会長）、井手伊澄、岩本陽児、太田美帆、貝原俊明、佐合昭浩、辰巳厚子、富川尚子、西原要四郎、布沢保孝、二見秀太郎、柳沼恵一、吉川雅子 以上 13名

プログラム委員：堂前雅史

事務局：稲田センター長、鈴木担当課長、松田事業係長、井上担当係長、高木担当係長、村田担当係長、小林担当係長、小山主事（記録）

〔欠席者〕 小川久江、押村宙枝

〔傍聴人〕 2名

〔資料〕 ・第14回生涯学習センター運営協議会レジュメ

- ・プログラム委員の立場からの現状と課題「まちだ市民大学HATSの成果と課題」資料1
- ・2015年度生涯学習センター事業 企画書 資料2～12
- ・2015年度生涯学習センター事業 企画書兼事業評価シート 報告1～報告9（当日配布資料）
- ・東京都公民館連絡協議会の活動について（当日配布資料）
- ・まちだ市民大学についてのメモ（当日配布資料）
- ・「まちだ市民大学HATS推進計画」検証と提言（当日配布資料）

### <市民大学について>

事務局：今年度は市民大学についてご検討いただくということで、状況を知る方法として市民大学の見学を実施している。今回はプログラム委員の立場からどういった課題を認識し取り組んでおられるかということについてプログラム委員の堂前雅史氏に話を伺ってきたい。

プログラム委員：2002年から環境講座のプログラム委員として携わり、その後も何年か関わってきた。

「町田市民大学HATS」講師としては人間科学講座に毎年携わってきている。大勢のプログラム委員のなかでそれぞれ意見や考えがあると思う。私が代表というよりも環境講座や人間科学講座に関っているうえで考えていることをお披露目させていただきたい。

お配りした「まちだ市民大学HATSの成果と課題」（資料1）に沿ってお話させていただく。1991年にまちだ市民大学HATS推進協力員会議が結成され、1992年には「まちだ市民大学開設準備フォーラム」が開催され12のプログラムが発表された。これは1983年の町田市長期構想にある「市民手づくり大学」で「生きがいある人生に挑戦しボランティアやまちづくりを担っていくための学習機会を市民が相互に手づくりで提供し、多様な形で人づくりを進める」「市民を地域づくりの主体ととらえ、実践的な参加・交流型の学習を指向している」で示されたものが原型になったといえる。市民ボランティア活動が公に注目されるようになったのは1995年の阪神淡路大震災以降であり、その後に政府がNPO（非営利法人）を後押しする取り組みも出てきた。そういった動きは‘90年代半ばに出てくるもので、行政がボランティア等を中心とした市民と一緒に地域課題を解決して行く、しかもその人材を養成していくという発想が1983年に出ていたという町田市の先見性に驚くべきものがある。それが1992年に「市民大学のプログラムは、市民が身近な諸課題を学び、個々人の文化の高揚を図る『場』であります。その成果は、地域文化づくりに、健やかで温かい地域のまちづくりなどに、反映されることが市民大学の目標でもあります」とプログラムというかたちで発表され、「多摩丘陵学・自然論」「心と体の元気学」の2講座が試行として開講された。翌1993年からまちだ市民大学HATSとして、現在の町田の郷土史講座にあたる「まちだ市民史学」と福祉の講座にあたる「共に生きるまち・人」が加わり正式開講した。翌年には多摩丘陵学からボランティア養成に力がシフトされた「まちとくらしの環境講座」や「陶芸」が加わり、さらに翌年には現在の国際学講座や人間科学講座の原型となる講座が加わっている。まちだ市民

大学HATSは「あなたを励まし、地域を育てる」を基本コンセプトとしている。また、HATSのHはHumanity（人間性）、AはArts（芸術・文芸）、TはTechnology & Science（技術・科学）、SはSports & Health（スポーツ・健康）ということで、当初は相当色々なジャンルを総合的に学ぶことが想定されていたようだ。

また、本日お配りした「まちだ市民大学についてのメモ」は‘90年代に職員として携わった古屋氏の記述を抜粋したものである。1990年の町田市民大学構想検討委員会市民大学HATS構想については、この当時には「生涯学習計画が存在していなかったためか、生涯学習に関する諸課題にすべて市民大学で答えようとしたかのような壮大で総花的な内容」という記述がある。1つは「生涯学習の総合的システム」として、「学校教育、社会教育、地域の学習活動をつなぎ総合的な学習へと発展させ、町田の文化を創造し継承していく主体をつくること」、「生涯学習のための情報センター、研究センター、人材バンク」、「学習に関連する市内のあらゆる機関や活動をネットワークする結び目」と掲げたが、1998年時点では「まったく実現できなかった」「公民館の代用品のように見なされ、“公民館とどうちがうのか”という議論もしばしば行われた」と記述されている。ここに出ている人材バンクや情報センターといった部分は現在の生涯学習センターに通じる機能であると思う。2つ目の「ユニークな学習領域」として、一種のボランティア養成の側面が見られるまちだ市民学〔社会的課題に運動型で取り組み、市民の社会参加と交流をはかる〕、そして遊々創造学〔自らの趣味や資質を高め、成果を町田文化として発信する〕、生き生き技術学〔伝承技術や先端技術を生活に活かし文化へと高める〕、心と体の元気学〔心身をリフレッシュし、健康ではつらつとした生活を創る〕というものを想定していた。事実上、「あなたを励まし、地域を育てる」というコンセプトのなかで市民ニーズを重視した“あなたを励ます”型と、市民活動やボランティア養成を重視した“地域を育てる”型の別々の意味合いとして2つ方向性で考えられるようになった。また、この辺りで「方向性が不明瞭」という意見も出ている。3つ目の「市民とともに作るプログラム」も大きな特色であり、「プログラムは市民生活から芽生えた学習を育て、市民のアイデアを活かし、市民とともに作りあげていく」「市民の学習運動と連携し、活動者が市民大学の講師や学術員であるような関係を築いていく」「講座型よりも参加・交流・体験型の学習方法を主体とし、学習成果が継承され地域社会に環流されるようなプログラムづくりを目指す」としている。この項目の市民の参加においては市民大学の修了生がプログラム委員として活躍するなど比較的成功的部分と言える。市民大学立ち上げの頃にはスタッフがローテーションを組んで、室内講義・野外演習の事務作業等をサポートする「自然論同窓会」といった講座運営を主軸の一つとする修了生グループも立ち上がっていた。今でもそういった流れを継承しているグループもある。実際にこの頃の「自然論同窓会」の活動報告として、講座をどのようにお手伝いしたかの記述が見られる。ここで参考になるのは、田中雅文氏が市民大学の4タイプというものを分類していることである。市民参画と社会指向性を軸にして分類し、例えば市民参画「無」社会指向性「無」であれば、カルチャーセンター的に教養を積むために勉強する「学習消費型」、テーマに社会的課題に取り組むが、行政が主導で解決できる市民を育てようといった「人材育成型」、社会性がないが市民が参加して面白いものを学ぼうという「自立教養型」、市民が参加して社会的指向性がある課題を学んでいこうという「市民社会型」というように分けているが、まちだ市民大学HATSは自立教養型と市民社会型に分類されるだろうと私は考えている。

「まちだ市民大学HATSの成果と課題」（資料1）に戻る。プログラム会議について記載されている。講座名にも変更があり、私どもがやっている「まちだ de エコツアー」及び「まちだ de エコライフ」（環境講座）は、参加者が集まらない事態に直面する度に名前を大幅に変えている。初めのうちは環境講座の参加体験型ボランティア養成講座などとしていたのだが、「まちだ de エコツアー」にしたら参加者が少し回復した。「まちだ de エコライフ」も当初は「町田市民環境講座」という名前だったが、同じ理由で変更していった。また、「まちだ de エコツアー」は市民のボランティア活動現場や環境問題の現場に行くなど実地的に学んで行くかたちをとり、「まちだ de エコライフ」はもう少し論理的に現在の町田市の環境問題について行政や学者の方にお話いただくかたちをとり、使い分けをしている。講座の受講者は二極化して

いて、理論的に学びたい方は深い教養に興味があり、環境問題でいえば地球環境問題などのテーマのほうが喜ぶが、町田市のごみ問題がテーマとなるとなんだそれと言われてしまう。一方で自分たちの環境に目が向いている方にとっては、なぜ地球温暖化を話題にするのかということになる。これを両方総合的に学んでいくとなるとなかなか難しく、市内のごみ問題がテーマであれば、できるだけ地球規模の環境問題などと繋げるようなメニューを作っている。また、施設を見に行く変則的なプログラムを作ると評判も良い。しかしテーマがテーマだけに、どうしても難しい話になってしまい悩むことがある。「多摩丘陵学・自然論」はもともと多摩丘陵に特化した自然入門講座として浸透していたが、後に町田市内の自然を知ろうという「多摩丘陵の自然入門」の自然講座と町田市でどういった環境問題が起きているのかを学ぶ「町田の環境講座」に別れ、さらに体験学習的な「町田の環境・参加体験講座」が入り3講座になった。現在は、「町田の環境講座」と「町田の環境・参加体験講座」が1つになって、ボランティア養成型である環境講座（前期「まちだ de エコツアー」・後期「まちだ de エコライフ」）と町田市の自然の楽しさを知ろうという自然講座（「多摩丘陵の自然入門」）の2タイプで構成されている。本来座学中心だった環境講座も、今は動物園などの施設見学を組み合わせることで参加者数が少し回復している。当初は前期の参加体験型講座を受けて、後期は社会的な課題についてさらに理論的なことを学ぶかたちを想定していたが、なかなか前期・後期の両方を受けていただけの方がなく、むしろ最近では少し抽象的なことや身近ではない課題から入って、後にボランティア養成というかたちの取り方も一つかと思っている。また、資料1に環境講座が「6人のプログラム委員のうち、3人は講座修了生で構成されている」「9つのプログラム会議のうち7会議には修了生が委員として参加している。」とあるが20年もやっているとそういった流れがあるのも当然であり、修了生団体が市民大学の講座運営支援やまちづくりに活躍することが期待されていた。2014年の「まちだ市民大学HATS修了者団体紹介」には自然・環境分野は11団体、福祉で16団体、健康で2団体、国際で9団体、郷土史で2団体、陶芸で1団体、人間学で8団体、その他2団体の、合計51団体がリスト化されている。これは、当初考えていた町田市の地域課題に取り組む市民を養成していくという視点から重要なことだと思う。例えば自然・環境系の最初の修了生団体で1993年に結成された「みどりのHATS」は、講座運営も役割の一つにした団体だった。当初は自然を楽しむウォーキングをしようという活動が中心だったが、後に新たにボランティアで活動する動きが出た。それによって、参加体験型講座の受け入れ団体の一つになり、修了生が市民を育てる組織として機能している例の一つである。発足当初に比べると修了生が講座を支援するようなことは少なくなったが、現在もプログラム委員等で支援しているのは重要なことである。資料1（P42）の表はボランティア参加体験型講座、座学講座での修了者への「講座を受けた後どうしますか。」というアンケートである。ボランティア参加体験型講座は「更に学習を深めたい。」という方も多いのだが、「何かの活動をしてみたい。」、「家でできることをしたい。」という方も多いことが言える。また、座学講座は「更に学習を深めたい。」という方が圧倒的に多く、それぞれの講座のねらいの違いが反映されている。資料1（P43）の1999年に専門家運営協議会の一員でもあった瀬沼氏から、市民がプログラムを作り、職員と共同して行っている点で高い評価がされている。

「まちだ市民大学についてのメモ」（当日配布）に戻る。基本コンセプト「あなたを励まし、地域を育てる」だが、2つの異なったコンセプトの流れがあったのではないかと昔の資料を読んでいて思った。市民ニーズを重視した“あなたを励ます”型、市民活動やボランティア養成を重視した“地域を育てる”型で、市民のニーズと社会のニーズのそれぞれを尊重することがつよく留意されたとある。まちだ市民大学HATS設立から関わってきた岸氏の論文では、“あなたを励ます”型・“地域を育てる”型について「市民大学の将来をカルチャースクール型に一元化しないためにも、ぜひとも慎重に、大切に育成されるべきものと認識されていた」と書かれている。一方で、古屋氏のほうは「それにより、社会的必要課題への取り組みや“地域”の視点がつよく意識されるようになり、その後のプログラムの方向付けに大きく影響した。一方で、構想が狙いとしていた市民文化の創造にかかわる学習が軽視される傾向となる」とある。その後、2000年にまちだ市民大学HATS運営協議会が出した提言では“あなたを励ま

し、地域を育む”が市民大学のモットーであるが、“励まされたあなた”がその力（知識と意欲）をもって“地域を育む”活動に参加する、すなわち学習成果の“地域還元”こそ市民大学の基本姿勢である」とあるように、「地域を育てる」ということをかなり重視していたように見える。2007年にまちだ市民大学HATS運営協議会が出した「まちだ市民大学HATS推進計画検証と提言」では「“まちだ市民大学HATS”の他に類を見ない最大の特徴は“地域を育てる”つまり、地域に関わる力を持った人づくり、を正面に掲げていることである。いうまでもないが、市民との協同こそが、現在および将来の地方行政の最大課題であり、この課題に応える人材の育成に資する機関がまさに、“まちだ市民大学HATS”なのである。この特徴を明確に認識し、そのいっそうの発展を図るべきである」と述べている。瀬沼氏なども「地域を育てる」型のことを「自治体の主催する市民大学、町民大学は全国各地に多数あるが、その多くは著名人の連続講演会であったり、趣味、教養色の強いカルチャーセンター的なものである。本市民大学は、それらとは大きく異なり、これまでみてきたように、市民がプログラムをつくり、運営についても、職員と協同して行っている」と他自治体と比較して述べている。詳細に見るとさらに求めたいことはあろうが、「多くの修了者団体を生み出していること―地域づくりの人材養成機関として成功。」とありそれなりに成功したと見ていいと思う。また、「市民が市民を育てる「市民社会型」の特色を活かしたプログラム。」にもなっている。一方で定員がなかなか満たないこともあるのは、学習消費型の講座を求めている市民の消費者としてのニーズと、これからの社会にこういったことを取り組む市民が増えていって欲しいといった社会ニーズがずれているということであり、仕方がないことなのではないかと思う。学習消費型のほうが客の入りはいいのは当然で、有名な先生を呼んでくれれば満員にはなるが、社会ニーズを重んじる「市民社会型」の特色を活かすのも重要である。私は資料にもあるように「行政の経済的・人的資源が限定されている一方で、地域課題が多様化していく現代社会においては、社会的課題に取り組む市民の養成が急務。」「『市民が市民を育てるのを行政がお手伝い』では概括できないか？」と考えた。目標が見えづらくなっているとしたら、こういった点を整理したらいいのではないかと私なりに整理した。

また、参加者がどうしてもシルバー世代が多くなっているのはどの講座で言えることだと思う。それはシルバー世代の社会的活躍を求めるといえる点では成功していると言える。例えば環境保全などでは定年後の方々の活躍は目覚ましいものである。しかし長期的に町田市の市民社会を維持して行くということを考えると、若い世代の社会参加をなんとかしたいところだ。勿論、子育て世代が忙し過ぎる等といった問題もある。子ども、若年層、子育て世代への対象の移動についても考えてみる必要がある。例えば、環境教育の世界では、10才未満の時期の自然体験が重要とされている。この時期は「地球が壊れそうだ」など恐い話をしてしまうと、環境問題から逃げ出してしまう大人になってしまう。「自分の身近な自然がこんなに楽しい」という経験をすると、大人になってから「それが壊されるなら、なんとかしないと」という大人に育つというのがアメリカなどの環境教育の論文で発表されている。恐らくそれぞれの分野で感受性のつよい年代やその年代向けの教育方法というものがあると思うので、そういうことを考慮して考えてはどうかと思う。例えば市民大学の間人科学講座をやらせていただいているなかで、安楽死などの問題は非常に関心が高いのだが、生命操作、遺伝子診断などのテーマは未来の話であるということに関心が低い。これから子どもを育てる世代にとっては相当厳しい選択を迫られる社会的課題だと思っているが、実際はなかなか声が届かない。また、高校生向けまちづくり参加講座をやっている川崎市高津市民館などでは高校生が地元のFM局番組を作ったり、地域のインタビューをしてみたりと、「地域社会でなにか面白いことができる」と感じられる講座になっている。そういったことも地域を育てるといって重要なことだと思う。

社会参加のありようという項目は、プログラム会議に修了生を入れるということも重要であるし、他の講座でどういったことをやっているということプログラム委員が知る機会も必要だと思う。年に1度プログラム委員が集まる会議はあるが事務局からの連絡事項が中心になっている。市民大学だけでなく、他の事業でどういった講師が呼ばれているのかなどを知る機会も必要だと思う。また、市民と行政の協働が急がれる社会的課題の洗い出しも必要である。「やろうかと思ったが、分野外なのでやめた」とか「他の講座でやってもらいたい」等といったケ

ースを共有することで、2つのプログラム会議が合同で1つの企画を行うなども考えられる。今考えると修了生団体の勉強会の設立を支援していたかつての市民大学のパワーはすごかったと思うし、そういった動きがプログラム委員の人材養成にも繋がっていた。また、そういったものを再構築できないものか。講座運営への修了生の参加システムの再構築もできないものかと思う。また、市内大学との連携も、かつて市民大学でやっていた。さがまちコンソーシアムの登場で役割がややこしくなった気もするが、「もっと難しい講座をやって欲しい」「学んだ次の段階を考えたい」という受講生がいらっしやるため、生涯学習講座や研究生などさまざまな制度がある大学と連携していくような動きが考えられる。

運営体制については、市民大学時代の運営協議会与プログラム委員は年に1度、会合を持っていたが、現在は両方が話題にしていることがなかなか噛み合わないと思う。また、旧運営協議会には市民大学をよく知っている方や設立当初から関わっている方がいらしたが、現在の運営協議会では何を評価されているのかがわからないとプログラム委員も戸惑っていることもあり、評価基準なども明記したほうがよいのではないかと思う。各プログラム会議との「職員と市民と一緒に作る」という信頼関係は時代と共に薄れてしまい、各プログラム会議ごとの委員人選など暗黙の了解のようなものや市民活動をやっている人同士の紳士協定みたいなものがあるが、新たにきた職員はそういうものが読み取れなくて摩擦が起こることもある。「職員と市民と一緒に作る」という点の再構築は必要なのではと思う。また、プログラム委員が講座を録音しようとしたら、職員に不正アップロード防止のため禁止されたことがあった。真意はどうあれ、プログラム委員に「プログラム委員内で講座内容を共有することができなくなってしまふ」、「私たちが作ってきた講座ではないのか」という疑念を抱かせてしまうきっかけになってしまうとしたら勿体無いと感じた。市民大学は行政の事業なので、どうしても事業評価は必要であると思うが、修了生団体の設立や修了者の活動、修了生のプログラム委員就任、講座運営の協力など、市民が市民を育てるという環流がどのくらいあるのかということも評価基準の一つとして重視してはどうかと考えている。

(意見・質問)

委員：「まちだ市民大学についてのメモ」(当日配布)のなかで、情報センターや人材バンクについて現在の生涯学習センターでも持てる機能ではないかというお話があったが、なにか考えがあるか。

プログラム委員：これは修了生団体との連携かと思っている。現在でも修了生団体のリストはあるが、もう少しディープにやっていると、「こういった学習がしたいが、講師を雇うお金もないのだが…」というときにスムーズにご紹介ができるかたちができると思う。

委員：そういったものを積極的に支援して行く仕組みを考えていくということか。

プログラム委員：そうである。

委員：公民館とどう違うのかが一つの問題として触れられていた。現実には市民大学と公民館が一体化しているが、今更どう違うのか述べても仕方がないことなのではないか。市民大学はある目標があってそれに基づいて教育するという一つのプログラムだと思う。対して公民館は明確な目標はないが、集まった皆が自由に地域の課題を考えて自分で問題を設定してアプローチも考えるいわばシナリオがない勉強の場だと思う。大きな目標としては人づくりをして地域の課題に答えるというのは同じことを目指しているのではないかというのを私としては思っている。改めて、市民大学と公民館活動の違いについて伺いたい。

プログラム委員：おっしゃるように、市民が考えるという点は共通しているが、市民大学は毎年固定していることや、町田市にとって重要な市民と行政で連携していかななくてはならない課題を扱うというのが大きな特徴である。せっかく固定しているものだから、修了生団体を支援するなどできれば、公民館が支援するというだけではなく他の部署に繋いで活かして行くことが必要なのだと思う。そういったことで色々なジャンルで活躍する人を育てて行く。どうしても公民館が育てると勉強会の場所提供になりがちである。もう少しその先に進んでいけば通常の公民館とは違った毎年やっていくことの意味があるのではないかと思う。

委員：お互いにそういったことが必要なのではないか。市民大学においてもある講座で限定されたカリキュラムを学習しそのプログラムの範囲の中の課題について考えるが、その枠からはみ出た

ところで連携をもって解決しなければならない課題も残っている。お互いに勉強した講座の分野の狭間で出てきた問題や一定のカリキュラムのなかでは見出されないような課題についてどう解決するかというのを、公民館的な自主学習活動のなかで解決していくのも一つのやり方であると思う。両方の課題を取り上げて一つの生涯学習という大きな枠組みが完成されると考えると市民大学も公民館活動も違いはないのではないかと思う。

プログラム委員：市民大学以外は市民が気軽に企画を立てられるので、もっと試行錯誤的なものがたくさん入っていいと思っている。市民大学はもう少し長期的に連携して行くものと言っているのではないかと思う。

委員：私は市民大学に当初から実習生や委員として関わってきている。そのときから市民ニーズ重視の自立教養型と地域を育てる市民社会型かという点でプログラム委員の中でも揉めてきていて、自立教養型でも良いのではないかという意見もあった。私は市民社会型で企画してきたが、応募するほうはほとんどカルチャースクールのような自立教養型と考えて応募してくる。私自身も「運動でもしたらいいだろう」というレベルで始めたが、市民社会型となると気軽には始められないものだろう。私は講師としても携わってきたが、歴史などを座学で1時間、残りの1時間をウォーキングにしたプログラムの際に、「もう話はいいから歩こうよ」という声がかかり出た。「市民大学は市民社会型で地域で展開するきっかけ作りというコンセプトがある」と説明しても、「話としてはわかるが、我々は運動をしに来ているのだ」という意見が出た。プログラム委員のなかでも「実践中心でいくべきではないか」、「高齢者が地域で展開することができるのだろうか」という話も随分あったが、結果的に地域で展開するところまでなかなか行かない。今日皆さんに配ったのは中高齢者の健康づくりのための「ゆるやか健康塾」という修了生団体の案内である。玉川学園地区の社会福祉協議会と連携しながら展開をしているが、こことからだの元気学（現在の健康学講座）からは修了生出た団体が一つあるだけである。また、「こことからだの元気学」では殺到していた応募者は、現在の「こことからだの健康学」に変わった途端に座学が中心になり減ってしまった。一方、ことぶき大学で健康コースをやったら応募者が3、4倍になった。ということは、市民ニーズは自分が動きたくて来るのであって、多くの参加者である高齢者層が「地域に展開してとか、みんな誘い合ってやれと言われてもやらない」というのが本音になるのだろう。私は地域社会に展開してみようという方がごくわずかでも出てくればいいのではないかと思っている。先日、健康学講座を見学したら「講座の結果を伝えましたか」、「自分でやってみようと思いますか」という資料を配られていて、現在も市民大学のコンセプトが守られていることを感じた。また、地域社会でなくても家族や知人などに「こういったことをやっているよ」ということを伝えられれば、それが地域社会への展開と考えても良いのではないかと思った。

プログラム委員：市民社会型が重要であるという点で同感である。健康学講座のプログラム会議と交流がなかったので、今回お話が聞けてよかった。

委員：大半で出てくるのは「理論や座学はいいから、実際に運動したくて来ている」、「地域への展開については考えておらず、今講座を受けていることが楽しければそれでいいのだ」という意見であった。

プログラム委員：カルチャースクールのような形式が必ずしもいけないとは思わないが、別の主旨のところでもやってもらって、市民大学は市民の地域への展開を評価指標に入れていただければ良いと思う。長い目で見たときに将来町田市が困ったときに市民の力で助けてもらうという伏線になってくるのではと思う。

委員：プログラム委員や職員の間でも、民間のカルチャーセンターと市民大学はなにが違うのかと議論しながら、やはり市民大学は地域社会へのきっかけづくりであり、市民社会型の展開をしなければいけないのではないかと進めてきた経緯がある。

委員：2点お伺いしたい。1点目は、人材バンクがうまく行っていない現実があり、やり方や仕組みに問題もあるのだと思う。修了生などOBを活かしてという点で意見を伺えないか。2点目は若者という問題について、若者の受講率について意見を伺えないか。

委員：市民大学はよく出来ていて今までの歴史に否定することは無いと思う。今、市民大学の課題を考えるのならば、未来志向型で今後どういった未来を描き、町田市民を育てたいのかを考える

べきである。現在の傾向として、生涯学習部が市長部局にある市町村と、教育委員会にある市町村2つある。市長部局にある市町村は色々な部署と連携し地域課題に答えていこうとしているが、教育委員会にあると従来型のカルチャーセンターのようなものに収まってしまっていることが多い。全般的に高齢者に参加者が偏っているというのはミクロな部分であり、マクロ問題から見ないといけないと思う。例えば、自律教養型と市民社会型を2階建てにしないと環境を学んだ人がすぐに市民活動に移るのは課題を捉え解決し交渉や企画をするなど技術的な部分があるものなので難しい。なかなか学んだ人が地域課題を解決するまでいきにくいと思う。そこを一緒にやろうとするとプログラムやターゲットが明確にならず、人を集めにくいことがある。堂前委員からヒントをいただいたので、まずは、マクロな部分で市民大学が何を指すのか、そしてミクロの部分でどう展開して行くのかを考えていきたい。

プログラム委員：最初にいただいた人材バンクについては具体的なアイデアを持っていない。これだけ団体がありリストがあることは財産なので、使い道がなにかあると思う。若者の動員については、どの自治体も困っている。大学生がボランティアとして携わっても、日本社会では会社員になると途切れてしまう。うまく行きかけていると思っているのが、子どもや高校生である。とくに高校生は学校を通じてチラシを配れば全員に情報を渡すことができる最後の世代である。また、子どものうちから、その地域の面白さや素晴らしさを知り、自分が愛される場所を見つけるとするのは将来的な投資である。マクロとミクロという点は当初の市民大学の壮大な考えは、生涯学習に留まらず市全体の色々な部署と連携した市民育成制度ということなのだろう。また、市長部局付けになると様々な部局との連携が可能になる可能性があるが、社会教育的な部分が抜けてしまう可能性もあるので、基礎的な部分は公民館的市民大学から学んで、そこから先のボランティア活動は様々な機関でやっている講座を受けるなど、繋がっていきやすい作りを作っていければいいのではないかと。ミクロの部分は人を集める工夫をし続けなければいけないだろうし、以前は市民大学受講者がどこも大勢来ていたことを考えると、時代の流れが変われば違うものがうけるということもある。気長に取り組んでいくべきことだと思ふ。

会長：今回は、貴重なご指摘をありがとうございました。

#### ○ 生涯学習センター運営協議会委員 委嘱伝達式

→ 町田市立小学校・中学校校長会代表の変更に伴い、稲田センター長から貝原委員、井手委員に委嘱状を授与。

#### <協議事項>

##### 1、2015年度生涯学習センター事業の企画について

###### (1) 生涯学習ボランティアバンク1日体験講座

事務局：今年度は7、11、2月の3回に分けて、生涯学習ボランティアバンクを市民に広く知っていただくために1日体験講座を開催する。前回、「生涯学習ボランティアバンクの主旨等を説明する機会を設定すべきである」というご意見等があり、1日体験講座に参加するだけで終わってしまうケースもあったので、前年の改善点として自治会、子ども会、福祉施設などイベントを企画されている制度を使っていただく方向けにも案内を送り、「こういった制度がありますので活用してください」ということをお伝えしている。また、市民大学の修了生団体についても、ボランティアバンクでも併せてなにかできればいいと考えている。

###### (意見・質問)

委員：資料2にある「各施設や学校、老人会、子ども会などの企画担当者」というのは、相手先の担当者のことか。

事務局：そうである。7月は子ども向けのプログラムになるので、PTAや子ども会など色々なところにお伝えさせていただいている。参加するのはお子さんだが、「こういったことができます」ということを見ていただくために別途見学者も5名程度設けている。2回目以降も、ターゲットを絞った中で、それに関する企画をやっている方々向けにPRできればと考えている。

委員：対象で「市内在住、在勤、在学の方」とあるが、非常に良い企画なのであまり限定しないでどなたでも参加可能にしてもよいのかと思うが、いかがか。



事務局：ボランティアする方にとってはどなたでもよいのかもれないが、制度自体が町田市民の知識経験を市民に循環させていく主旨があり、まずは市民の中での循環に限ったかたちの利用要件で、今回は縛りを設けさせていただいている。うまく循環が出来次第、他市にも広げて行くというのも中期的には課題と言える。

委員：知り合いで紙飛行機教室をやっている方がいるのだが、各小学校から引っ張りだこである。小学校などでも昔遊びは人気だから、幼稚園や小学校にチラシを配るだけでもなにかの機会に参考になり利用することがあるだろう。PRが非常に大事だと思う。あらゆる機会を通じてじっくりとPRいただくことで、利用者も増えるだろう。

## （２）平和祈念事業

事務局：終戦70年ということで、生涯学習センターだけではなく企画政策課や福祉総務課など市全体の取り組みになっている。事業の中身については、資料3のとおり、展示、イベント、公演などを予定している。星印が付いている事業については、国体の時に集まった500名ほどのボランティアの方々からなる「まちだサポーターズ」という団体を今年度初めて活用し、お手伝いいただこうと考えている。佐合委員から「ぜひ子どもたちへの夏休み前にPRをしてほしい」といただいている事前意見にもあるとおり、子ども向けのギャラリートーク、スタンプラリー、折鶴作成、子ども向けの映画会、紙芝居、ゼルビー・ハスのんといった着ぐるみと呼んだイベントなど子ども向け企画を抜粋して、夏休み前に配られる子どもフェアの冊子に原稿を提出している。

### （意見・質問）

委員：非常に良い企画である。空襲にあって大変苦労したとか、戦争中の生活、原爆の被害にあった方などさまざまな方がいらっしゃるが、一番切実に平和のあり方を感じている方というのは前戦に行った方ではないかと思う。そういった方の声を聞く機会を設けたほうがよいのではないか。しかし、実際には90歳以上となり難しいと思うので図書館などと連携して、生涯学習センターで資料展示をして、その後図書館で本を読んで、平和や戦争について考えていただく機会になればよいのかと思う。

会長：他の部署が参加されるのはどういった経緯か。

事務局：終戦70年ということで、町田市全体で一体的にやっという話になった。

会長：一体的というなら、図書館などもっと連携しては。

委員：子どもが小学生なので、実際に先日子どもフェアの冊子を貰ってきたが、内容がわかりづらく、後から、追加で補足チラシがあるような記載であった。他の子どもセンターの記事のように見ただけで内容がわかるものではなかったので、子どもフェアの記事だけでは申し込むのは難しいと感じた。

## （３）生涯学習センター家庭教育支援事業について

事務局：「平成27年度東京都家庭教育支援基盤形成事業実施要綱」をご覧ください。当センターでは家庭教育支援事業を行う際に、財源として都の補助金を活用していることから、東京都の要綱に沿ったかたちで事業を展開している。補助金を受けるにあたって、要綱の第4の1「運営委員会の設置」について、各事業を実施する際は運営委員会を設置して第三者の意見を求めながら事業を進めていくことが条件として書かれている。生涯学習センターでは2013年度からこの補助金を活用していて、生涯学習センター運営協議会は家庭教育の運営委員会として兼ねるものとしている。今後も、生涯学習センター運営協議会の中で家庭教育について、事業の評価やご意見をいただきながら、事業を進めていきたいと考えている。今年度の家庭教育事業の目的について、これまで一定の成果を上げてきた一方で新しい課題も生じてきたので、資料4のとおり①～④の目的を掲げさせていただいた。それを受けてどのような取り組みとしていくのかというのが「2. 主な取り組み」①～③である。「①保護者への学習機会、情報の提供」ということで、乳幼児、小学生、思春期にそれぞれの子どもの年代に応じた学習プログラムを提供している。昨年には中学生の子を持つ保護者向けの講座があったが、「思春期」と名称を変え、対象も小学校高学年以上に拡大することを考えている。「②地域の家庭教育を支える担



い手の育成」として、家庭教育支援学級を行っていく。1年目は学習活動を行い、2年目はその学習活動を地域に還元する。「③担い手の活動支援、ネットワーク形成」では、担い手や学習機会のきっかけづくりとなるような親と子の交流ひろば事業（きしゃぽっぽ事業）と家庭教育支援担い手企画事業について、家庭教育支援学級の修了生などが2年間の学級活動修了後も家庭教育に関する課題解決のために担い手として継続して活動していけるよう引き続き市と協働して活動を行ったり支援していくといったことを考えている。図にしたのが資料4別紙①である。このようにそれぞれの事業が循環型になり、単体として捉えるのではなく事業間の関連付けを意識しながら実施していきたい。

（意見・質問）

会 長：思春期というのはいつからいつまでを指すのか。

事務局：おおむね小学校高学年以上とする。

会 長：高校生も含むのか。

事務局：そのとおりである。

委 員：昨年度まであった幼児向けプログラム系は単体ではなくなったのか。乳幼児と小学生の間の幼児向けのプログラムがあったと思う。

事務局：現時点では厳しいと思うが、前向きに検討している。運営協議会において、報告をしていきたい。

（4）市民企画講座について

事務局：13団体応募があり、1団体を取り下げ、12団体のうち5団体を採択とした。採択された団体と協議しながら準備を進めている。また、漏れてしまった2団体については平和祈念事業及び家庭教育支援事業で実施するよう準備している。事前にご質問があった選考基準については、実施要綱に掲載されている。

（意見・質問）

なし。

（5）子ども向け事業「夏休みキッズウィーク」について

事務局：毎年生涯学習センターでは夏休みに子ども向けのイベントを行っている。2013年度までは夏休み最終日1日のみで行っていたが、昨年から1週間の期間を設けて実施している。子ども向けイベントは生涯学習センターに限らず子どもセンターなどでも行っているため、連携をとりながら差別化を図っていきたい。生涯学習センターとしては、子どもたちに学習機会を提供すると同時に、地域で活動している方々の日頃の成果を発揮する場に繋げたいと考えているのでボランティアバンクの登録者や大学生を講師に招いた。日頃培ったものを子どもたちに披露し地域の方と子どもたちの交流の場となることを目的にしている。

（意見・質問）

委 員：チラシの事前配布について、夏休み前にPRすることは可能か。定員との兼ね合いもあり応募者が殺到しても抽選漏れが出てしまうので難しい点もあるが、いかがか。

事務局：先程も話題があがっていた町田市内の子ども向けイベントがまとめられた児童青少年課が発行している子どもフェアの冊子に掲載している。すでに各小学校で配布されていて、7月21日から応募受付と記載してあるにも関わらず、既に問い合わせが来ている。チラシについては例年は各市民センターや図書館にプラスして、各子どもセンターや運営協議委員にもご協力いただいている。できるだけ多くの方に周知できるよう、工夫していきたい。

委 員：例年の参加率は定員オーバーが多いのか。

事務局：講座の内容にもよる。さまざまな傾向がある。

会 長：定員延べ169人というのは前年度も同じか。定員は催しによって差があるのか。

事務局：⑧ミュージカル体験は40名くらい、他が約20名、④はエフエムさがみに出向くものなのでスペースの都合上4名ほどになっている。

委 員：そうすると迂闊にPRするとたくさんの子どもの子どもが漏れることになり、かわいそうである。

事務局：今年は定員が少なくなってしまった傾向にある。

(6) 青年事業「浴衣着付け講座～ゆかたで夏を楽しもう!～」について

事務局：若者向け講座で生涯学習センターと109MACHIDAとの共催講座である。内容については記載のとおりである。

(意見・質問)

会長：定員は例年通りか。

事務局：9時30分～と11時30分～の2回あり、それぞれ15名定員である。

会長：何回目になるか。

事務局：もともと市民サークルとの企画をやっている、そのなかでより若者を呼ぶということで109MACHIDAと組んでやることになった経緯がある。

会長：だんだん定着して言って、応募者は増える傾向にあるのか。

事務局：それなりに参加いただいているが、すぐに定員が埋まる状態ではない。

委員：109MACHIDAのショップとの連携はしているのか。

事務局：109MACHIDAの中のショップの店長が講師としてあたる。生涯学習センター入り口にも若者向けにマネキンを置き、宣伝している。

(7) まちだ市民大学HATS後期プログラム

事務局：9月、10月から開講する後期について一覧にまとめた。8講座ある。市民大学の課題と展望の項目でもご意見をいただいたが、例えば郷土史については修了生団体が毎回テーブルのセッティングや片付け、受講生へのご案内、現地学習への付き添い参加などご協力をいただいている。

(意見・質問)

なし。

(8) ことぶき大学後期プログラム

事務局：年間を通して映画、歴史、美術、世界遺産コースがあるが、後期の講座は昨年に引き続き、くらし、音楽、健康コースを実施する。くらしコースは定員が多く154人となり、高齢者に特化すべき生活に関する課題についての講座となる。音楽コースは昨年に引き続きコーラスを行うが講師が変更になった。健康コースについても新しい講師となった。質問にもあったように、リンパビスクは造語であり、リンパの動きに注目しながら、エアロビスクのように行うものである。

(意見・質問)

委員：随分講座数が少ないような気がするが、いかがか。

事務局：2012年から2013年にかけて、内容を整理した。それまではシルバー人材センターが関わり少人数で仲間作りができる講座などを行っていたが、色々な事情でどちらかというとマスプロのほうにまとめてしまった経緯があり、それを継続しているのが現状である。今後、ご議論いただければと思う。

委員：単純に言うと、ことぶき大学は無料、市民大学は3000円である。一緒に考えることが間違っているのかもしれないが、結局受講料0円というところに惹かれているというのも結構耳にする。せめて2つくらい増やしてもいいのではないかと思うが、予算的に無理か。

事務局：いまのところ、そういうことになる。高齢者対策の補助金を貰っている関係もあり、より多くの方にご参加いただきたいということで無料にしている。

委員：もう少し予算を活用していただき、講座を増やすようにしてほしい。

会長：前期が5コース、後期が4コースか。

事務局：通年が4コース、前期のみが1コース、後期3コースである。

委員：補助金を貰っていても1人1000円取るかたちでやりくりしてはどうか。

委員：前にそういった話があったが無料だからということが、肝心になっている。

委員：募集要項にも「免疫力と回復能力アップ」「認知証予防になる」「脳の萎縮が止めることができる」「関節がやわらかくなる」「筋肉量が増える」とあれもこれもよくなると良いこと尽くめで

書いてあるが検証されているのか。断定した書き方が心配である。

事務局：日本リンパビクス協会がこういった書き方をしているものだと思う。

委員：断定しないような方向で、ユニークな発想で表現していただければと思う。

## 2、事業評価について

### (1) 第10回まちだフレッシュコンサート

事務局：5月16日に開催された事業である。4つの大学から今春卒業されたフレッシュな6名の方に出演していただいた。今年度からアンケートの回収率をあげようということで、バインダーをつけた結果、前年度47%から65%まで上がった。イベントダイヤルでキャンセルをする場合は必ずご連絡をくださいと伝えた結果比較的ご連絡をいただくことができ、追加の方も観ることができた。ところが、定員が154人だったが、実際は出演者の招待者などもいたため、160人となり増えすぎてしまったので、次回は定員を守って開催したい。

(意見・質問)

委員：ぜひ四重奏など出演者同士が繋がるような仕掛けをしてほしい。来年度検討をお願いしたい。

### (2) 小島資料館共催講座「小島家古文書の中の新選組記事」

事務局：もっと改良していかなければいけないのではないかとご意見にもあったが、町田市内にある東京都の有形文化財がデジタル公開されたということで共催講座として行った。募集が150人であったが、応募者数及び受講確定者数162人のうち小島資料館が集めた参加者が40人くらいいたため定員を超える応募者数であったが、実際の受講者数は131人であった。評価欄のプログラムの妥当性のBについては、参加者のアンケートで内容が難しいとあったためである。

(意見・質問)

委員：プログラムの妥当性は今までの評価を見ているとみんなBになっている。盛況であった数字が並んでいるのにBになっていることもある。ここまで数字の上ででているものなら、Aにしてもよいのではないか。

事務局：Bは一部改善の余地があるということで、Bにしている。

委員：効果指標を目標値として、90%を達成しているのであればAで良いと思う。目標値を設定していて、それを越えたのならAで良いと思う。その辺りが書いていないので、アンケート結果からどのくらいの人がどのくらい「よかった」と言ってくれたのかということによって、AかBかということに表れてくるのではないか。多くの人が言ったのであっても改善点がまだあるということでBとしているのか。その数字を示していただくとよりわかりやすいのではないか。

委員：記録を今後文書化してくださいという参加者の声がある。貴重な講座であるので昔なら冊子にしていたと思う。例えば、社会教育実習など学生を受け入れた場合に、記録のボランティアをやってみるなど、工夫をしていただけると良いと思う。他市の公民館で今までは歴史講座をやりっぱなしだったが、学生が入って初めて完全な記録ができたことがあったので、ご検討いただきたい。

事務局：過去に記録の作り方に問題があり、以前も作った後に全てやり直しになったことがあり話したことが文章になるとニュアンスや伝わり方が違ってくるため難しい。今後の課題ということで、検討させてほしい。

### (3) 第2回町田市生涯学習センター利用者交流会

事務局：2回目の利用者交流会である。昨年度参加者が91人だったが、今回は人数が少なく51人となった。工夫としては基調講演を行い公民館についての基礎を学んだ。全体のまとめをするにあたり80人もいたら大変だったのではないかと意見があったので50人程度で全体としてのまとめとしてはよかったのだと思う。まだ企画運営委員には集まっていたがこれを継続していくにはもう少し基礎的な学習をして企画運営委員を増やしていかなくてはならないという話をしている。なんらかの学習会等かわりの場をつくりながら、企画運営委員の体制を強化していかなければならないと思っている。

(意見・質問)

委員：柳沼委員と二見委員と西原委員は企画運営委員やっていたと思うが、感想を伺いたい。

委員：当日は布沢委員、富川委員にもご参加いただいた。参加者からの評判は良かったのだが、人数が昨年に比べ減ってしまった点は改善していきたい。まず、企画の主旨をもう一度改めて確立する必要があると思う。同じような行事で毎年10月に行うセンターまつりがある。センターまつりは活動成果の発表の場であり、さらに活動を活性化させるものである。利用者交流会はサークル団体の活動を発展するためお互いに話をする場だと思っている。それが大きな狙いだと思う。そのためには、色んな団体、世代、市民グループ等がお互いの立場で話し合っ、共通項を話し合ったりするきっかけの場にしたいと思っている。今年度取り組んだ企画運営委員が継続して色々なことを勉強して来年度に向けていければと思っている。

委員：主旨とねらいは非常に良いものだと思うのだが、どうやってそれを一般の市民にこの会を理解していただくかが問題だと思っている。

委員：市民大学のメンバーがもう少し入ってくると活性化するのではと思う。どちらかと言うと、センターまつりは自律教養型、利用者交流会は市民社会型になると思う。両方大事なことであると感じる。

## <報告事項>

### 1、事業評価の最終報告

事務局：報告1～9まで、資料のとおり報告する。

### 2、センター長報告

#### ○家庭教育支援事業について

稲田センター長：石井くにのり議員から一般質問がございました。詳細については、町田市ホームページをご覧ください。

#### ○町田市市民参加型事業評価について

鈴木担当課長：今回の評価対象は12課12事業あり、生涯学習センターについては生涯学習講座事業が対象となった。評価は市民と有識者で構成する評価人チームと市職員が、行政の抱える課題や事業の改善に向けた方策等について公開の場で話し合い、私ども生涯学習センターについては約1時間弱行われた。主な内容については6点となる。①「公民館（生涯学習センター）は市内に一箇所が良いのか。市内の大学施設等を利用して講座等を行うことはできないのか。」、②「行政組織のなかで様々な部署が同じような事業を行っている。庁内の他部署との連携について具体的にどのようなことを考えているのか。」、③「市民企画講座で、地域の課題解決に繋がるような講座が行われているが、その成果はどうか。」、④「生涯学習センターは貸し館事業だけではなく、講座の実施などソフト事業を展開している。ソフト事業は本来、場所はどこでもよいのではないか。」、⑤「講座の内容や事業の内容について人数をきちんと把握しているのか。そして、どのように反映しているのか。」、⑥「受益者負担の市の考え方、また他市町村の考え方はどうか。」。それなりに厳しいやりとりが行われた。尚、評価の内容については大きく分けて3点あった。①「有効性について。学習を通じて課題解決された、学習した成果を地域に還元できている、市の施策に還元しているということ、それぞれの事業できちんとかたちになっていないのではないか。」、②「効率性。あらゆる年代の市民を対象に、コストをかけずに事業の樹立を図って欲しい。大学連携、民間活力などがこれにあたる。」、③「市民のニーズの把握を積極的にやるべきである。」といった意見を評価人5人からいただいた。また、評価人全員が「要改善（前向きな改善）」という判定になった。今後については、業務改善プログラムを策定して10月を目途に市民に公表して行く。

(意見・質問)

委員：生涯学習センターの後、文学館の評価を傍聴した。「限りなく廃止に等しい」という判定がされていた。もし廃止の動きがあるのなら、生涯学習センターの一部として使用することはできないか。

事務局：文学館も同じ生涯学習部だが、所管の関係もありコメントしにくい部分である。限られた時間

の中で評価人に十分に伝えることができたかという部分がある。

会 長：この内容は10月に公表とのことだが、どのようなかたちで公開されるのか。

事務局：生涯学習センターについては、前向きに改善ということでご意見をいただいた部分について、10月を目途にご報告を考えている。

会 長：評価の対象事業はどうやって選ばれるものなのか。

事務局：町田市の経営改革室がピックアップしている。

### 3、町田市生涯学習審議会の議論について

委 員：前年度は町田市の生涯学習プランを小改定することが仕事であった。地域でどういった生涯学習が行われているのかという実態理解を出発点として、団体や各機関に取り組みを聞く取組みの中で、今回は生涯学習センターについての勉強会があった。シルバー人材センターについて報告があり興味深かった。また、市役所の中で色々な普及、啓発活動が行われているが生涯学習部で広く考えて行くという話が委員長からあった。地域の町会から市役所に寄せられた要望のなかに、地域の学習ニーズを示すものはないかということで、庁内の調査を行っている。昨年度の終わりには振り返りも含めてワールドカフェ形式での取り組みを行った。次の会議には資料として配布される。職員も担当が変わり、選挙管理委員会に異動した職員から、町田市の投票率の紹介があった。若い人たちの投票率が低く、今後18歳から投票できるようになることで、どうやって啓発して行くのか。生涯学習センターでも連携しながら、若者の政治的教養も大事であると考えた。市民参加型事業評価について文学館の評価について話があった。国内でも非常に珍しい施設であり、観光の拠点として地域の経済にも文化・教育施設が貢献していくPRの仕方があってもよいのではないかという意見が出た。次回会議は7月30日に開催される。また、8月29日に社会教育委員研修会が町田市で行われる。

### 4、東京都公民館連絡協議会の活動について

#### ○委員部会について

委 員：4月委員部会では他市各委員の話聞いた。共通して財政面で厳しくなっていること、若手とシニアの両方を引っ張って行くのに苦戦していること、「公民館ってなに」という部分で活性化に困っているという声があり、委員部会等を利用して、各市の情報交換を行うことを続けていこうと話し合い、人脈作りの大切さも話された。館長部会、委員部会、職員部会の3部会の構成になっており、この部会の位置づけは公民館に関する課題やテーマについて情報交換を行いながら研修会をやっていくものである。また、関東甲信越静ブロック研修が11月14日に小平市で開催される。続いて5月委員部会の報告である。7月17日に国立市でESDをテーマに東京都公民館連絡協議会研修が開催される。また、国立市が市民企画の「未来夜話」というチームを組み始めたこと、小金井市がNPO受託を始めたことがニュースとして伝えられた。次回会合では、公民館に育てられた市民が核になり、市民力をどうやって活かしていけばいいのかということテーマに検討をしていく。9月の中旬に開催予定である。

#### <その他>

会 長：次回は7月20日月曜日10時～町田市生涯学習センター6階学習室2で開催する。